窓辺

挫折

宮地（みやち） 良樹（よしき）

古希も間近となるこれまでの人生で、私も少なからず挫折を経験してきました。最初のつまずきは、兄姉が通っていた静岡大付属静岡小の入試で不合格となったことでした。今から思えば受験の準備もせずに「受けてこい」という親も薄情ですが、6歳の春に経験した人生最初の挫折は、その後も胸に突き刺さり、傷が癒えるまで何年も引きずる大きなトラウマになりました。

次の蹉跌（さてつ）は、高校を卒業した大阪万博の年に大学入試に失敗して浪人したことで、再び大阪万博があると聞くだけであのつらい記憶がよみがえります。

浪人で一番つらいのは翌年合格できる保障がないことで、それを除けば予備校の授業は学ぶことも多く充実した日々でした。社会人になっても数学の問題が解けない夢で目を覚ますことが一度ならずあったので、相当なストレスだったことは想像に難くありません。

ただ、青春の1年は失うものばかりではなく、その後の人生に得がたい糧を残したのも事実です。それは「失敗した人の気持ちがよく分かる」ようになったことです。恐らく不遜な自信を喪失したことで尊大な自分は影を潜め、相手の失敗を受容し共感することができるようなったことは、その後の様々な人生の局面で私に大きな行動変容をもたらしたと分析しています。臨床医としても研究者としてもその大切な資質を涵養するための1年だったと総括するのは強弁でしょうか。

（静岡社会健康医学大学院大学長）

静岡新聞

©静岡新聞社　無断複製転載を禁じます